



2012.2.28 No.2

発行 泊原発の廃炉をめざす会

〒001-0032札幌市北区北32条西6丁目1-10
サスティナブルシティビル
TEL 011-594-8454
FAX 011-594-8455
URL <http://tomari.sakura.ne.jp>
E-mail news@tomari.sakura.ne.jp
郵便振替口座 02790-1-100850

第1回 口頭弁論開かれる

2月13日午後2時から札幌地裁805号法廷で（札幌地裁で一番大きい法廷です）1時間半弱にわたって、記念すべき第一回期日（「期日」とは、裁判所や当事者など訴訟関係者が訴訟に関する行為をする日時をいいます）が開かれました。

まず原告が提出した訴状が陳述され、次に被告が提出した答弁書が陳述される、という手続きが行われました。ちなみに訴状とは、裁判所に民事訴訟を起こす際に提出する書面のことをいい、「誰が原告」「誰を被告」「どういう理由で請求原因」訴え、「どういう判決を希望するか請求の趣旨」が記載されています。

答弁書は訴状に記載された請求原因や請求の趣旨を認めるか否かが記載された書面のことです。そして陳述とは、原告や被告が、裁判所に対して事件に関する主張を行うことを言いますが、通常は口頭ではなく書面で行われあらかじめ提出している書面の内容を「陳述します」の一言で終わります。

しかしながら、この泊原発廃炉訴訟のように事件が大規模かつ社会的問題に関するものの場合、意見陳述が行われることが多く、この日も原告からは訴状の内容についてわかりやすくかつポイントをついた意見陳述が行われました。

まず原告団から、団長の斉藤武一さんと副団長の常田益代さんの意見陳述が行われました。岩内町民の斉藤さんは、「泊原発によって故郷はねじ曲げられ、苦悩の道を歩んでいる」として、岩内町の小学生が原発の爆発が怖いから故郷に残りた



札幌地方裁判所前で

くないと学校で発言したこと、町民は常に泊原発で事故が起きるかわからないという強い不安を抱えていること、原発誘致以降岩内の基幹産業だった漁業が壊滅状態になったこと、原発交付金が地域に歪みを生じさせているといった現地の深刻な状況について意見を述べ、「故郷再生・原発のない新しい北海道を造るためにも、泊原発の廃炉を求める」と締めくくりました。

つぎに北海道大学の元建築史・美術史教授の常田さんから原発は人間の生き方を問い、正義を問い、倫理を問い、人間の地球への関わりかたを問う問題だとして、自然の威力の前で人間は奢ってはならず、現在の科学では正確に地震を予知できない以上、地球が地震活動期にある現在、地震大国の日本において、地震活動期以前の甘い設計基準で建設されている日本の原発は非常に危険であることが述べられました。また放射性物質と核廃棄物は無毒化できないことや、内部被ばくを受けている原発作業員の人権が無視され一度事故が起これば、地域の子どもの健康や暮らし・自然・基幹産業に甚大な被害が生じるのであり、人々の基本的人権を侵してまで原発を稼働することは倫理的に許されるものではないとし、原発安全神話が壊れた今、私達人間は同じ間違いを繰り返すべきでないと主張しました。

原告団のつぎに弁護団からも意見陳述がなされました。①現在、全国各地で原発差し止めの裁判が起きていること。脱原子力エネルギーは可能であること。②福島原発事故は、国際的評価基準に照らしてもチェルノブイリ原発事故と並ぶ史上最悪の原発事故である



前列右から 小野共同代表、菅澤弁護団事務局長、河合弁護士、市川弁護団長、斉藤原告団長、常田原告副団長

こと。福島において多方面にわたる深刻な被害が広がっており、それだけでなく国内広い範囲にわたって放射能被害が日々拡散していること。こうした甚大な被害を生み出している福島事故のような原発事故は、泊原発でもいつ起きてもおかしくないこと。

③日本は地震大国であるにもかかわらず多数の原発が立地し、まさに「地震付き原発」を抱えていること。

④原子力発電の仕組みとして、燃料であるウラン235が分裂する際に発電のためのエネルギーとともに「死の灰」と言われる核分裂生成物が大量に生じること。泊原発の原子炉の型式は加圧水型原子炉(PWR)というものであり、放射性物質が含まれる部分(一次冷却系といいます)が常に157気圧という高圧にさらされていることからこの部分に事故が起きますと、一挙に放射能を含んだ一次冷却水が抜けだしてしまうという危険な構造であること。などが主張されました。DVDの動画やパワーポイントを活用し、わかりやすく、かつ原告の主張のポイントをついた陳述が行われました。傍聴席は満席で、全員が真剣に原告の意見陳述に聞き入っていました。

(弁護士 林千賀子)

北電は「絶対的な安全は不可能」と開き直り



左、齊藤原告団長 中央、市川弁護士 右、河合弁護士

口頭弁論後、記者会見と報告集会が弁護士会館で開かれました。北電は答弁書で「原発に関し、絶対的な安全性を求めることはできない。常に幾ばくかの危険性は伴う。時には危険性の程度と、科学技術利用で得られる便益との比較を考慮して利用している」と主張しました。市川守弘弁護士は「開き直りであり怒りを持ってこの事実を道民に伝えたい」と話しました。またこの日のために東京から来られた、脱原発弁護団全国連絡会代表の河合弘之弁護士は「原発訴訟で電力側がここまで開き直ったのは初めて。原発は事故になれば取り返しがつかない。科学技術に関する一般論では通用しない」と批判しました。

主権者が社会を変える



チェルノブイリ以降、日本で最初に営業稼働されたのは泊原発一号機。福島事故の後、またしても最初に稼働となったのは泊原発三号機。そして定期点検のため最後に止まるのも(多分)！世界から「北海道民は、どこまで呑気なのだ」と思われていたとしても不思議はない。冬期間の有事の際、確実に避難経路への誘導がされるのか？ 除雪のための人員確保は？ ヨウ素剤の備蓄は8万錠のみ。有事の際の経口は一刻を争うのに住民には手渡されてもいない・・・など問題は相変わらず福島原発事故前と変わりなく積み上げられたままだ。長年にわたって電力の需給状況や余剰電力の数値を追いかけるエネルギー論争に持ちこまれ続けた原発問題だったが、福島の事故は日本全体の産業、経済、自然環境、命たちの未来、そして人々の心に甚大な被害を与え続けている。住民投票条例制定案(1988年)の署名運動以来久しぶりに「主権者が社会を変える」と信じ私は原告になった。(原告・マシオン恵美香)

口頭弁論傍聴記

初めて傍聴席に座りました。しかも我が原告団の息遣いが聞こえてきような近さでした。

齊藤武一原告団長、常田益代副団長の意見陳述(p3~4)は論点が整理され、感動的でした。弁護団の、パワーポイントを使つての泊原発の問題点の説明も簡潔でした。気になったのは北電側の若い弁護士の姿でした。意見陳述の間、全く顔色は変わりませんでした。

私は学生時代に水俣病に出会い、公害反対運動にのめり込みました。当時読んだ、石牟礼道子さんの「苦界浄土」は何度も読んだバイブルです。工場排水などに含まれるメチル水銀が魚や貝に蓄積し、これを食べた多くの人々が、水俣病になり苦しみました。美しい不知火海で漁を生業としてきた人々に訪れたいわれなき水俣病に衝撃と怒りを覚え、市民運動に加わったのです。公害反対から自然保護に、そして原発反対運動にとつながりましたが、原発を止めることは出来ませんでした。2011年3月11日に起きた福島原発の事故。人間の力では制御できないことをまざまざと教えてくれました。泊原発はその地で生きる人たちだけの問題ではありません。泊から100キロ圏内に6割の道民が暮らしているのです。原告と弁護団の陳述を聞き、612人の原告のひとりとして歴史的な訴訟に加わっていることを改めて実感した一日でした。(事務局・原告・樋口みな子)



「泊原発によって故郷はねじ曲げられ、 苦悩の道を歩んでいる」 廃炉訴訟原告団 団長 斉藤武一



岩内町の斉藤武一です。これから、泊原発の現地の話をいたします。裁判長に置かれましては、初めて聞くような話となると思いますの、しっかりと聞いてもらいたいと希望いたします。

岩内町からは、岩内湾を隔てて泊原発が真正面に見えます。

原発までの距離は5、6キロです。最初に、原発を見ながら生活するということはどういうことになるのかを話します。私の娘が小学五年生の時のことでした。小学校の先生が「将来、大きくなったら故郷に残る人は手を挙げてほしい」と尋ねました。しかし、クラスの誰も手を挙げませんでした。先生は驚いて生徒に聞くと、男子生徒が立ち上がり窓から見える泊原発を指さして「だって、先生、あれが爆発したら僕たちは終わりなんでしょう。だからこの町にはいたくありません」と話しました。そして町民は「泊原発で事故があったら、どうせ全滅だ」と投げ捨てるように言い「いつか、泊原発でも事故が起きる」と心の底で思いながら暮らしています。その町民の気持ちの端々が端的に表れたのが、1993年に起きた北海道南西沖地震のときでした。大津波警報が入る中、町民は高台に逃げました。夜でしたから、津波は黒い線のように見え、沖から押し寄せてきました。その津波を見ながら、町民たちは大声で、「津波で家が流されるのは仕方がない。しかし、原発が壊れて放射能をかぶって死ぬのはごめんだ」「原発はどうなっているんだ」と、泊原発への怒りをぶちまけていました。

次に、泊原発が町にやってきて、岩内の基幹産業であった漁業がどうなったのかを話します。岩内の漁師たちは、12年間原発に反対しました。しかし、お金の力でねじ曲げられ賛成へと転じていきます。そして、漁業振興資金として北電から26億円もらいましたが、600人の組合員で個人配分しました。最大でも1500万円しかもらえなく、漁協にあった借金が少し減っただけでした。原発に賛成すればたくさんお金をもらえると期待していた漁師の手元には、一円も渡りませんでした。漁師は、やる気を失い、漁師の夜逃げが始まりました。原発に賛成していた1981年を境に、岩内の漁業は崩れていきました。現在、漁業はほぼ全滅しています。

泊原発が来てどうなったのか、その結末ですが、基幹産業である漁業を失った岩内は、原発から仕事をもらい、原発で働くと、完全に原発に依存しています。今、岩内で産業といえば、原発作業員のための民宿経営となっています。私の故郷、岩内は、泊原発によって町全体がねじ曲げられ、心の底で原発事故を心配しながら、町民は、「活気がなく、死んだような町になってしまった」と嘆きながら暮らし

ています。そして、かつて原発に賛成していた町長でさえ、「人間なら、誰があんな原発をほしがる者がいるものか。原発から金をもらえるから賛成しているだけだ」と、本音を漏らしています。故郷は原発からの巨額のお金でねじ曲げられ、苦悩しています。ですから、故郷、岩内の再生のためにも、さらに、原発のない新しい北海道を造るためにも、一刻も早く、泊原発を廃炉にすることが求められています。

裁判長にお願いです。私がお案内いたしますので是非岩内に来てください。

「なぜ泊原発を廃炉にしなければ ならないか」

原告団副代表 常田（ときた）益代
北海道大学名誉教授

常田益代と申します。2年前に定年退職するまで北海道大学で建築史と美術史そしてデザイン論を教えていました。

2011年3月11日に福島第一原発事故がおきました。この日を境に日本中の人々が原発に向き合わざるをえなくなりました。一市民として私が学んだことは原発問題はたんなる電力の問題ではないということです。原発は人間の生き方を問い、正義を問い、倫理を問い、人間の地球への関わりかたを問う問題です。そして私は、原発は廃炉にするしかないという結論にいたりしました。

－自然の威力－

その理由の第一は、自然の威力の前で、人間の叡智などちっぽけなものにすぎないということです。それゆえ「確率が極めて小さいから想定しなくてもいい」という傲慢があってはならないのです。人間の想定しえないことが、自然界にはおこります。

日本列島の周辺には4つのプレートと多数の活断層があり、大規模な地震を起こします。泊原発の近くでも活断層が新たに見つかっています。現在、地球は地震活動期にありスマトラ島沖地震（2004年M9）チリ中部地震（2010年M8.8）、東日本大地震（2011年M9）とここ数年だけでも津波を伴う歴史的超巨大地震が発生しています。日本の地形さえも変えてしまった今回の大地震の余震と誘発地震が今も各地で起きています。しかし現在の科学では正確に地震を予測することができません。世界有数の地震国日本にとって原発はもっとも危険な発電方法です。現在日本にある原子力発電所は最もあたらしい泊3号機を含め、地震活動期以前の甘い耐震基準で設計されています。



－無毒化できない放射能と核廃棄物－

次に人類は放射性物質を無毒化できないという事実も学びました。私たちは核廃棄物の処理方法さえ知りません。原発はウラン鉱石の採掘から核処理場にいたるまで、その全行程で放射性物質を放出し続けます。核廃棄物から出る放射性物質の半減期はセシウム137で30年、プルトニウム2.4万年から10万年を要すると言われています。つまり、原発をつづけるということは、途方もない未来の世代に毒物を押しつけることにほかなりません。

－人権と倫理－

原発の点検と事故の収束は作業員の被爆という犠牲の上になりたっています。内部被曝を受けながら働く作業員の人権はまったく無視されています。また原発事故は子どもからあたりまえの日々を過ごすという基本的人権を奪ってしまいました。子どもは転校や屋内遊戯や家族との別れを強要されています。福島事故で明らかになったように、ひとたび原発事故が起これば、放射性物質は、人間が設定した同心円状の避難地域とは関係なく、風下に向かって拡散していきます。上空には常に西風が吹く泊原発周辺当てはめるなら、原発の東方わずか43キロ足らずの小樽や、70キロしかない札幌にも当然、汚染が及びます。仁木町から余市町に広がる果樹園やニセコや支笏湖の自然など、北海道の基幹産業である農業、畜産業、水産業、観光業すべてに甚大な被害が及びます。そして泊原発から100キロ圏内に全道の実に6割弱の人々が暮らしているのです。原発事故のおそろしさは、その不可逆性にあります。汚染された土地を回復することはほぼ不可能です。

電力の一部を賄う原発のために、命綱である安全な水と土と空気を引き換えにするほど愚かなことはありません。故郷も健康も生きがいもお金では戻りません。社会の公益に資するべき電力会社が、安心して日常生活をおくるといふ人々の基本的人権を脅かしてまで原発を稼働することは倫理的に許されることではありません。

－原発に安全確認はない－

「安全神話」は見事に壊れました。経済産業省原子力安全・保安院と原子力安全委員会のいう「安全審査基準に適合している」ことが「安全性の確保」にならないことが証明されました。そもそも、原発の安全確認ということがありうるのでしょうか。故障しない機械や設備はありません。仮に完璧な原子炉が机上で設計されたとしても、その複雑な製作工程と施工そして運転と制御と点検をするのは人間です。そして人間に思わぬ間違いはつきものです。原発事故が人間の手には負えないことも証明されました。収束技術も模索中です。すべて、これからのおおきな宿題です。

もし、人間にわずかばかりの叡智があるなら、同じ間違いを繰り返さないことです。事実を認め、事故に学び、学んだことをこれからの判断に生かすこ

とです。安心して暮らすには原発をとめるしかありません。子供、孫、そして未来の世代と地球を共有する万物のために、この大地を守るために、原発を廃炉にし、北海道にふさわしい再生可能エネルギーに転換する時です。

北海道知事に要請書（案）を提出します

北海道知事 高橋はるみ様

泊原発の廃炉をめざす会

要請書（案）

私たちは、昨年3月11日に発生した東京電力福島第一原子力発電所の惨劇を目の当たりにし、また多くの市民が未だ放射性物質の漏出・汚染による恐怖に放置されている状況をみて、北海道電力が所有している泊原子力発電所をすべて廃炉にし原発のない安心して暮らせる北海道をつくることをめざして活動をしている団体です。

泊原発では、すでに北海道電力が1号機及び2号機のストレステストの結果を保安院に提出し、再稼働に向けて着々と進んでいるように見受けられます。ただ現在、原子力発電所の再稼働については、地元自治体の理解を得るという視点から知事の同意を要するとされています。そもそもストレステストなるものは、コンピューター解析による机上の評価でしかなく、原発の安全性が「妥当」とするものでも、原発に対する「安全対策でもない」ものです。したがってストレステストの結果をもって、安全性が確保されるものではない以上原発の再稼働は到底認められるべきものではないと考えているところです。まして北海道電力は私たちの泊原発の廃炉を求めた訴訟において、そもそも絶対的に安全な原発などないと公言しているのです。

このような状況において、北海道知事は、北海道電力の泊原発の再稼働に関して、同意をするか否かについては慎重に臨んでいただきたく切望しております。そこで、知事に対し、以下のとおり要請します。

- 〈1〉北海道電力に対し、少なくとも泊原発から半径100キロメートル圏内のすべての自治体における住民説明会を開催することを要求すること。
- 〈2〉北海道が主体となって、北海道電力と市民との対等な議論の場を設けること。
- 〈3〉北海道知事は、少なくとも泊原発から半径100キロメートル圏内のすべての自治体における議会及び首長の同意を得られなければ泊原発1号機及び2号機の再稼働は認めないこと。
- 〈4〉泊原発の防災対策の地域を半径100キロメートル圏内に広げ、多くの北海道民の安全確保を最優先すること。

脱原発・持続可能で平和な社会をめざそう！ 全国一斉・さようなら原発1000万人アクションIN北海道



アクション

2月18日、札幌市かでの2・7で「さようなら原発1000万人アクションIN北海道」が開かれました。参加者が約1000人集まり、ロビーにも人が溢れました。

はじめに、このアクションを呼びかけた3人から発言がありました。小野有五さん（北大名誉教授）は、泊原発の廃炉をめざす会と被災者支援団体の「むすびば」の共催の3・11イベントを紹介し、子どもたちに大人の義務を果たしましょうと訴えました。続いて麻田信二さん（道生協連合会会長理事）が、私たちには北海道の自然再生利用を促進する責任があり一日も早い脱原発の決断が求められていることを強調し

ました。続いて倉本聡さん（脚本家）は「さようなら原発は、原子力を容認してきた私たちが1980年の生活に戻る覚悟をすることである」と訴えました。

全国の「さようなら原発1000万人アクション」呼びかけ人のひとりである鎌田慧さん（ルポライター）は国内に54基ある原発が、現在3基しか稼働していないが、何の不都合もないことを示しました。3・11で子どもたちが何のために被曝したか、東電、政治家、学者が儲かるためのものでしかなかったと強調しました。国民が本気で原発に反対してこなかったことを反省点に、原発廃炉を市町村に申し入れ、政府に脱原発を覚悟させるためにも、1000万人署名を、みなさんで集めようと呼びかけました。

福島からの発言として、愛澤卓見さん（飯館村）は、情報が途絶えて何の防御もしないで後から被曝を知った。現在、被曝した人に対する補償の話が何も出ていないことを語り、未解決の問題を明らかにしていく必要性を訴えました。札幌市に移住している穴戸隆子さん（福島県）は、いつ福島に帰れるか不安、泊原発を止めたいと結びました。最後に「集会アピール」を全員で拍手採択し、市内をデモ行進しました。

（事務局・原告・富田素實江）

上記写真は北海道民医連新聞の提供です

講演会

デモ行進後に講演をされたのはルポライターの鎌田慧さん。『日本の原発危険地帯』や『原発列島に行く』などの著書があります。青森県弘前市に生まれた鎌田さんは、各地の原発現場を歩いてきたけれど、青森県には原発関連のすべてのものがあると語ります。

本州最北の町、下北郡大間町は、函館まではたったの23kmの近さです。大間の海はマグロやコンブ、ウニやアワビなど魚介類の宝庫として全国に知られています。大間町で建設中の大間原発の用地買収を拒み、たったひとりで闘い続けていた女性が熊谷あさ子さんでした。海の幸と

畑の野菜があれば食べて行けると大間原発予定地にある土地を売らなかったのです。鎌田さんは、熊谷さんがひとりでも闘ったから、大間原発の建設を遅らせることができ、その結果、福島原発の事故で建設の再開ができずにいると語り、札幌を積まれても頑として、自分の生き方を全うされたあさ子さんを讃えました。あさ子さんは急死されましたが、今は娘の小笠原厚子さんが母の遺志をつぎ、大間で土地を守っておられるそうです。7月に東京で「さようなら原発」の10万人集会を計画していること。北海道からもたくさん参加して欲しい。そして原発は止めよう。平和で安全な国にしようと訴えました。

（文・写真 樋口みな子）



Stop原発 北海道交流集会

Stop原発 北海道交流集会が2月18日に開かれました。全道各地から泊原発の廃炉をめざす会も含む43団体が参加しています。脱原発をめざすゆるやかなネットワークです。この日は、旭川・せたな・後志・倶知安・江別、廃炉の会や 女たちの会などが活動報告をしました。運動の仕方が多様で、反原発に関わる小さな講演会や映画会などを行っています。



3.11メモリアルコンサート&報告会・講演会にご参加を！



3.11から1年。大地震と福島第一原発の事故によって私たちの生活や思いも大きく変えられました。1年間、被災者によりそってきた「むすびば」の活動と、泊原発の廃炉をめざす運動をふりかえり、講演や音楽を通して、新たな出発のときになりたいと思います。佐野眞一さんは、日本を代表するノンフィクション作家。『東電OL殺人事件』では東電の本質をえぐり、『巨怪伝』で、原発を日本に導入した正力松太郎の姿を描いていた佐野さんは、3.11の直後に現地を歩かれ、『津波と原発』を書かれました。佐野さんならではの鋭い分析を講演で聴けるめったにないチャンスです。どうぞおいでください。

チケットの予約受付中！お名前と枚数を事務局にお知らせください。
1枚1000円（高校生以下無料！）

2012.3.11(日) 札幌市民ホール（12時開場）

プログラム

10:00～18:00	3.11一年展示 12時開場
12:30～13:15	むすびばの報告（三上共同代表の挨拶も含む）
13:15～13:30	廃炉の会報告（小野共同代表）
13:30～14:30	佐野眞一さんの講演「津波と原発」
14:30～14:45	休憩
14:46	黙祷
14:45～16:45	メモリアル・コンサート

あらひろこさんのカンテレ、嵯峨治彦さんの馬頭琴ジンベークラブ、アイヌ・アートプロジェクト下山武徳さんのギターなど楽しいコンサートです。



2, 13 ウラ集会の様子



講演会『放射線の健康被害の真実』

講師：西尾正道さん（北海道がんセンター院長）

日時：2012年4月20日（金） 18:30～20:00

会場：教育文化会館305研修室

（札幌市中央区北1条西13丁目）

参加費：500円 お問い合わせ 011-594-8454

原発事故後、医療ガバナンス学会のメールマガジンなどで、情報開示の問題、今後の健康被害などを訴えてきた西尾正道さんに、放射線治療医の立場でお話していただきます。

出前講座します！

泊原発の廃炉をめざす会では、時間の都合のつく限り、各地で出前講座を開きます。

泊周辺の活断層、放射能、裁判のこと等さまざまなテーマに対応します。学習会を受講した人が、原発の危険性を周りの方たちに伝えて欲しいのです。日程や講師派遣については事務局までお問い合わせください。

次の口頭弁論は5月28日（月）14:00～札幌地裁

詳細は未定です。近くなりましたらHPやメールマガジンでお知らせしますが、詳しくは事務局までお問い合わせください。

ようこそ裏集会へ

惜しくも裁判傍聴の抽選にはずれてしまった私たちは、謎めいた裏集会に参加するため弁護士会館に向かった。不思議な雰囲気的女性が「おいでおいで」をしている。



スクリーンが用意されていて、法廷同様にスタッフの方々がパソコンを使って原発の仕組みを図解して説明。ウラン235に中性子を衝突させ核分裂生成物を作り出していく。『減速材』とは『軽水炉』とは、何が問題点かを丁寧に解説。圧巻は世界と日本の地震発生の記録である。震源が地図上に機関銃のように連打されていく。「すごい、すごすぎる。」と息を呑む。一旦造ったら簡単に壊すことも再生することもできず、ただ人類の生命を脅かしつづける原発。こんな恐ろしいものをなぜ造ったんだ。最後に斉藤武一さん、常田益代さんの法廷での意見陳述文をふたりの淑女が代読し『裏集会』は終わった。（原告・大場幸子）

2012年2月28日発行

「泊原発の廃炉をめざす会」事務局

タイトルイラスト：堀川真 写真：榎本善太・油谷良清・高倉裕一・中村典代 編集：樋口みな子